

◆大串 章選

母笑くか父の囁きか虎落笛
よく喋る森の言葉よ木の葉落つ
余生とは老いの遊び場日向ぼこ
山眠る卑弥呼はここに眠るや
雪達磨涙流して消えにけり
冬風や砂丘に小さき人歩く
寒雀逃げて日溜り残りけり
水平線灯台守の日向ぼこ
大枯野地中に眠るもの数多
家並より探梅始む城下町

(日立市) 加藤 宙
(川崎市) 神村 謙一
(東松山市) 鈴木 圭
(守谷市) 久保田洋二
(前橋市) 荻原 葉月
(栃木県高根沢町) 大塚 好雄
(つくばみらい市) 飯塚 和男
(東京都江東区) 近藤 泰庵
(高松市) 信里由美子
(横浜市) 吉野 暢

【評】第1句。虎が泣き叫んでいるのか、考がすすり泣いているのか、虎落笛の音が胸に響く。第2句。木の葉の落ちる音や木の葉のすれ合う音など、森には森の言葉がある。第3句。「老いの遊び場」が言い得て妙。余生を楽しく過ごしましょう。

◆高山れおな選

玲瓏と海の檻や冬の月
初明り妻の寝息の向かうから
運慶の立ちあがりそり冬木立
戦争を知る人と食う鯨鯨鯨
無限なる素数隣り冬銀河
大寺や唐草文につらら垂る
翁の夢いつく駆くるや枯野原
をさなこの声高らかに土龍打
冬の蜘蛛ロタンの像を嚇とす
冬されにどつだんの紅いさ生きよ

(小城市) 福地 子道
(横浜市) 猪狩 鳳保
(福山市) 高垣 光利
(北名古屋市) 月城 龍二
(浜松市) 川口八重子
(福岡県鞍手町) 松野 賢珠
(北九州市) 松本ゆきこ
(松山市) 吉岡 健児
(大野城市) 野分 のわ
(福岡市) 菅野美佐子

【評】福地さん。海面に映える月光。檻の喩えに、自然に魅入られた気分が出てくる。猪狩さん。何やら圧倒される感じ。だが、何に？ 高垣さん。東京国立博物館の運慶展では、無著・世親や四天王がまさに冬木立のような威厳を見せていた。

◆小林貴子選

人生のエンドロールや冬の虹
大巨心の棘を抜きにけり
選択はいつもY字路去年今年
着水の余勢で鴨の群進む
イントロで戻る青春寒鳥
このあたり綿虫放つ一樹あり
胸高の帯のなからお年玉
水湖に放る氷片砕け音と散る
影もまた光に交へる福寿草
続けてと言ふ師のありて作句冬

(大和郡山市) 富野 香衣
(東京都世田谷区) 須藤 渉一
(神戸市) 山本 美鈴
(東かがわ市) 桑島 正樹
(印西市) 関根 早苗
(広島市) 高垣 わこ
(長崎市) 村山信一郎
(市川市) 渡部 幸子
(松阪市) 奥 俊
(さいたま市) 田中 松代

【評】一句目、人生の最後に私と関わった人の名をすべて掲げたら、どれほどの数になるのだろうか。二句目、新年を期し、抜けるものなら抜きたい。三句目、一本道の描かれた巻き紙を先に進み、分かれ道でどちらかを選ぶゲームを思い出した。

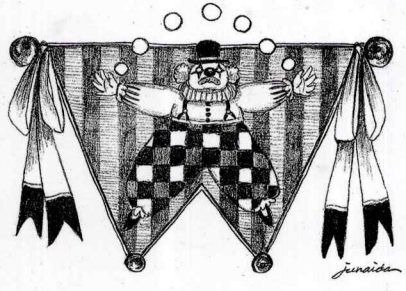
◆長谷川權選

男たち焚火を囲む原始人
一灯で足りる暮しや冬こもり
眠る山貧乏神の杜あり
光りつゝ研ぎ澄まされてゆく冬芽
黄昏を恐れて泣く子ちゃんちゃんこ
金剛力の大根をもらひけり
日向ぼこ遺品ばかりで身を包み
着膨れてやつとこさ切る足の爪
十年前のことなりと雪女
牡蠣も酒もふくらむほどの温め方

(甲府市) 村田 一広
(香川県琴平町) 三宅久美子
(さいたま市) 與語幸之助
(玉野市) 勝村 博
(東京都葛飾区) 小林 容子
(山梨県市川三郷町) 笠井 彰
(高知市) 加田 紗智
(多摩市) 田中 久幸
(境港市) 大谷 和三
(武蔵野市) 福田 一政

【評】一席。人類は大昔から焚き火をしてきた。その面影がしばしばよみがえる。二席。自分が欲しいものは理屈をつけて奪い取る、トランプ流の対極。三席。何を祈るのだろうか？ あればお参りしたい。十句目。酒がふくらむほどの爛。

朝日 歌壇 俳壇



＜日曜日のブローチ 38＞ junaida

短歌時評 影絵のような日本で

山崎 聡子

遠つたの冥きより奥くひとすぢの白光
かけがへなき國體
昨年、夫婦別姓を支持する人や性的少数者を「素直者」と表現し、「國體」の復古を求めた高島裕の連作「アイデンティティ」が物議を醸した。作品論を離れてその思想が批判を浴びた本作だが、この作品が描かれた背景には、ナショナリズムが高揚し、多様性の否定に向かいかねない現代日本の潮流があることは否定できないだろう。

そんな潮流のカウンターになりうるのが瀬口真司の歌集『BEAM』だ。二二三区の夜景の黒い本丸よ・何度もジャングルを生き延びて
国民の再・統合の再・想像 SPACE MOTHERSHIP が WARP
一九九四年生まれの瀬口は、これらを含む「バーチ」で笹井宏之賞を受賞。選考委員であるラッパのMoment Joon は本作の核を「戦前の天皇制の上に建てられた日本」と「高度経済成長期の日本」という二つの色褪せた栄光の影を負った現代日本の反映と読み解いた。本作ではまさに、皇居の暗喩である「二二三区の夜景の黒い本丸」・残留日本兵といった戦争や天皇制に紐付いたモチーフ、SPACE MOTHERSHIP のようなサブカルチャーが合体することで、戦前と地続きの、いつ戦時になだれ込むともいえない日本の姿が批評的に示される。

高島が軍事蜂起が起きた架空の東京を描いた「首都空襲」を発表したのが一九九八年。そこから連なる作品と瀬口の歌を並べたとき、虚ろな身体をした影絵のような日本の姿が浮かび上がる。(歌)

「俳句年鑑2026年版」 小川縣舟さんによる「2025年 100句選」、19歳から100歳までの俳人の注目作解説、600俳人の「諸家自選五句」など。(角川文化振興財団・3300円)
茨木和生句集「さやか」 昨年12月23日に86歳で死去した俳人の第18句集。「誓子忌に仰いでゐたる山の星」「やりぬくといふこと大事雲の峰」(運河俳句会・3000円)

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のほかき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104-8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます(週に2作品まで)。QRコードから。

風信